



《最近の高血圧性脳出血に対する治療方針》

脳卒中は血管がつまる脳梗塞、細い動脈から出血する脳出血、動脈にできたこぶ（動脈瘤）が破れて出血するくも膜下出血に分かれます。脳卒中の 2/3 が脳梗塞、1/6 が脳出血、1/6 がくも膜下出血の割合で発症しています。脳出血の初期症状は以下の症状が 1 つだけあるいは組み合わせあって出現します。

脳出血の原因の大部分は高血圧（高血圧性脳出血）ですが、他の原因として脳動脈瘤・脳動静脈奇形・脳腫瘍・アミロイドアンギオパチーなどがあります。最近高血圧に対する治療が十分に行われ、30 年前と比較して脳出血の発症率は 1/3 に、

- 急に片側の顔や手、足がしびれる。力が出なくなる。
- 急に寝ぼけたように意識がもうろうとする。
- 急にろれつが回らなくなる。言葉が出なくなる。
- 急にうまく歩けなくなる。めまいがする。酔ったようにふらふらする。
- 急に片方の眼がみえにくくなる。視野が半分になる。
- 急に頭痛がする。

死亡率は 1/10 に著明に減少しました。しかし現在でも高血圧性脳出血 100 人中 30 人は社会復帰、57 人は後遺症（12 人：軽度、10 人：中等度、35 人：重度）を残し、14 人は死亡しており、予後の悪い病気です。

1993 年 4 月から 2004 年 12 月までの 12 年間に脳出血 209 人が入院し、179 人(86%)に内科的治療が、30 人(14%)に外科的治療が行われました。脳出血の初期治療で最も大切なことは、発症 6 時間以内は再出血し易く、出血が増大し、予後を悪化させることです。そのため初期症状が現れた時には、救急車を呼び、脳卒中専門病院にすぐ受診して下さい。病院では再出血予防のために降圧剤、止血剤、鎮静剤を投与します。他に内科的治療には抗浮腫剤・抗痙攣剤・抗潰瘍剤などを投与します。外科的治療 30 人（14%）中 CT を用いた血腫吸引術 19 人（9%）、脳室ドレナージ術 6 人（3%）、開頭血腫除去術 5 人（2%）が行われました。血腫吸引術は血腫のまん中にチューブを挿入し、血腫を吸引除去する方法で開頭血腫除去術と比較して侵襲性が低く、現在では主な脳出血の外科的治療となっています。内科的治療・外科的治療でも血圧などの全身状態が安定後、急性期よりリハビリテーションを行います。

高血圧性脳出血の予防には危険因子を管理することが重要です。危険因子は高血圧、無症候性微小脳出血、血清コレステロール低値、多量の飲酒の 4 つで特に高血圧、無症候性微小脳出血が大切です。血圧は少なくとも 140/90 mm Hg 未満に管理することが重要です。無症候性微小脳出血は最近 MRI の T2★強調画像で簡単に診断が可能で、この所見が見られれば症候性脳出血を生じる可能性が高く、積極的な血圧管理が必要です。(U.M.)

小児脳神経外科とまこまい 参上

1.日本における小児神経外科専門病院

平成 17 年における胎児から幼児（就学前）までの小児専門神経外科がある医療施設は表 1 の状態です。とまこまい脳外では胎児～新生児を扱うことは出来ませんので、赤ちゃんについては苦小牧市立病院とともに協同で治療にあたりたいと思っています。とまこまい脳外小児脳外では生後 1 ヶ月以上のこども達から成人になっても障害を残した(キャリアオーバー)人達をみていきます。

【表 1】

北海道立小児総合保健センター	静岡県立こども病院	大阪大学	産業医科大学
宮城県立こども病院	愛知県心身障害者コロニー中央病院	兵庫県立こども病院	福岡大学
新潟大学歯学総合病院	名古屋市立大学病院	兵庫医科大学小児科	聖マリア病院
長野県立こども病院	名古屋市立東市民病院	島根大学医学部	大分県立病院
国立成育医療センター	(独)国立病院機構舞鶴医療センター	(独)国立病院機構岡山医療センター	熊本市市民病院 総合周産期母子医療センター
順天堂大学医学部付属病院	(独)国立病院機構大阪医療センター	広島大学	九州大学病院周産母子センター
埼玉県立小児医療センター	大阪市立総合医療センター	山口大学	
千葉県こども病院	関西医科大学	(独)国立病院機構香川小児病院	
神奈川県立こども医療センター	大阪府立母子保健総合医療センター	香川大学医学部	

2.苦小牧での小児神経外科地域医療の意味（とまこまいが変わる…地域に位置づくの生活）

今まで苦小牧では赤ちゃんや子供がその程度に関係なく脳に障害をもつ、脳の奇形をもつとなれば、ほとんどのこども達が“サッポロ”に行っていました。そして、その後の治療、療育もサッポロまかせ、教育になってもサッポロ、平取まかせが主でした。そのことは確かに親には負担でしたが安心？を与え



【図 1】

たかもしれません。しかし、成人近くになるとシステム的にはこども達は地域に戻されます。その結果、地域の人達は、“何この人達状態”となるのです。いままで苦小牧は程度、種類に関係なく障がいのある子供達の、地域（とまこまい）で生きづく機会をうばっていたようです。とまこまい脳外に小児脳神経外科をつくって、小児神経の地域完結型医療をスタートした大きな意味がここにあります。これらを含め子供達が小さな時から個々のニーズに対応したサービスが受けられ、障がいがあっても自由で幸せに生活できる街づくりを目指すために苦小牧の市民は、希勇心 7H を発足しました(図 1)。どうぞよろしく。(T.Y.)